

INFINITY-FORCE PRESENTS

# DA BARE GO!!!

びーえる・ア・ゴー!!

MACHINE ROBO RESCUE  
"BL ARE GO!!"  
FOR ADULT BOOK TWO



ADULT ONLY

DA BARE GO!!!



DANGER

DANGER

DA

DAN

DANGER

DANGER

ER

**MARE GO!!**  
マレ-ス-ア-ゴ-!!

INFINITY-FOCRE PRESENTS

ADULT ONLY

DANGER

DANGER

DANGER

DA

DANGER

DANGER

ADU

# CONTENTS

MACHINE ROBO RESCUE ADULT BOOK TWO

## "BL ARE GO!!

マシーラビット ..... 5  
<http://www.geocities.jp/mercyrabbit01>

ぶるまほげろー ..... 33  
<http://go.to/hogeroh>

22 ..... 広川浩一郎  
<http://karin.sakura.ne.jp/~hirokawa>

山下 うり ..... 21  
[http://www.geocities.jp/woory\\_y](http://www.geocities.jp/woory_y)

24 ..... キャプテン・ゴメス  
[YQX01323@nifty.ne.jp](mailto:YQX01323@nifty.ne.jp)

PRESENTED BY "INFINITY-FORCE"

DANGER

DANGER

DANGER

DAN

ANGER

DANGER

DANGER

DANGER

DANG

諸君ッ!  
俺様はハザード  
大佐だッ!!

来年正月にMRRの  
TV特番があるうちゆーのに  
我がデザスターの啓蒙災害  
特番が無いのは  
納得いかんよな?  
俺の死

なにようっ  
やめないさいよ  
アンタ達ッ!

ぶつとばす  
わようろう!!

そこで我がデザスター  
も年末特番  
小生意気なMRRの  
小娘どもの捕獲に  
成功ッ!

ミニガラゴロで調教した  
小娘どものちっこい身体に  
降り注ぐ『災害』の数々を  
お見せしようッ!

MACHIN ROBO RESCUE

ちじょくきいがい  
恥辱災害 24時

MERCYRABBIT 2003



はんっ！  
オードックスながらも  
返ってマニアックな  
セレクトかア？  
似合ってるぜえ

マコに仕込まれた  
ガラゴロローターで悶えたく  
無いのなら言われた通りに  
しろよ！！

ど…どうかな？  
一番小さいサイズ  
発注しておいて  
良かったよ  
金髪アリスタンの  
セーラー服姿が  
見えるなんて…

オモチャはね  
コレ…  
「ブラックカイマン」だよ  
吸盤で貼り付くディルドーで  
アクティブに腰をグラインド  
させるにはもってこいな  
大人のオモチャだね

(…なんて太いの  
選んだのよう…  
グロテスク…)

足おっぴろげて早速カイマンと  
やらを試してみろよ  
失神するんじゃねーぞ、命令だッ！

アリス子供じゃ  
ないもんっ  
なによ、こんな  
玩具くらいっ…

とろろ



おーおー、セーラー服着た  
パツキン炉梨が子供のクセに  
大人のオモチャで遊んでるのかよっ  
世も末だぜッ!! (笑)

どんなに…  
太くたって  
アリスにしたら  
こんなのどうってこと  
ないもんっ…!

見てなさいっ  
最高の喝采を  
浴びるくらいの  
イキっぷり!!  
見せてあげるからっ

あつ...!!  
やだっだめえ



世界的な子役  
アリストラン来店だもの  
記念写真撮っておこつ  
夕子にも自慢すつかっ!

写メールは...  
写メールは止めて  
ようっ!  
撮影許可出して  
無いのにつ!

気丈なプロ根性見せたと思ったら  
写メール禁止とはケツ穴いせえ事  
いいやがって! まるっと全部撮らせて  
やれよっ(´▽´)



残念だなア  
でも、当店でも一番  
太くて大きいカイマンを  
難無く遊べてるなんて  
さすが世界的子役っ!

うっさいっ...  
ファンつてホント  
勝手なんだから...

ぬるぬる  
ぬるぬる



…どうっ!?  
しっ…失神しないで  
…カイマンでいった  
わよっ!…!

アリス…アリス  
頑張ったんだからア…  
しかと…  
見ておきなさいようっ  
…

びん

びん

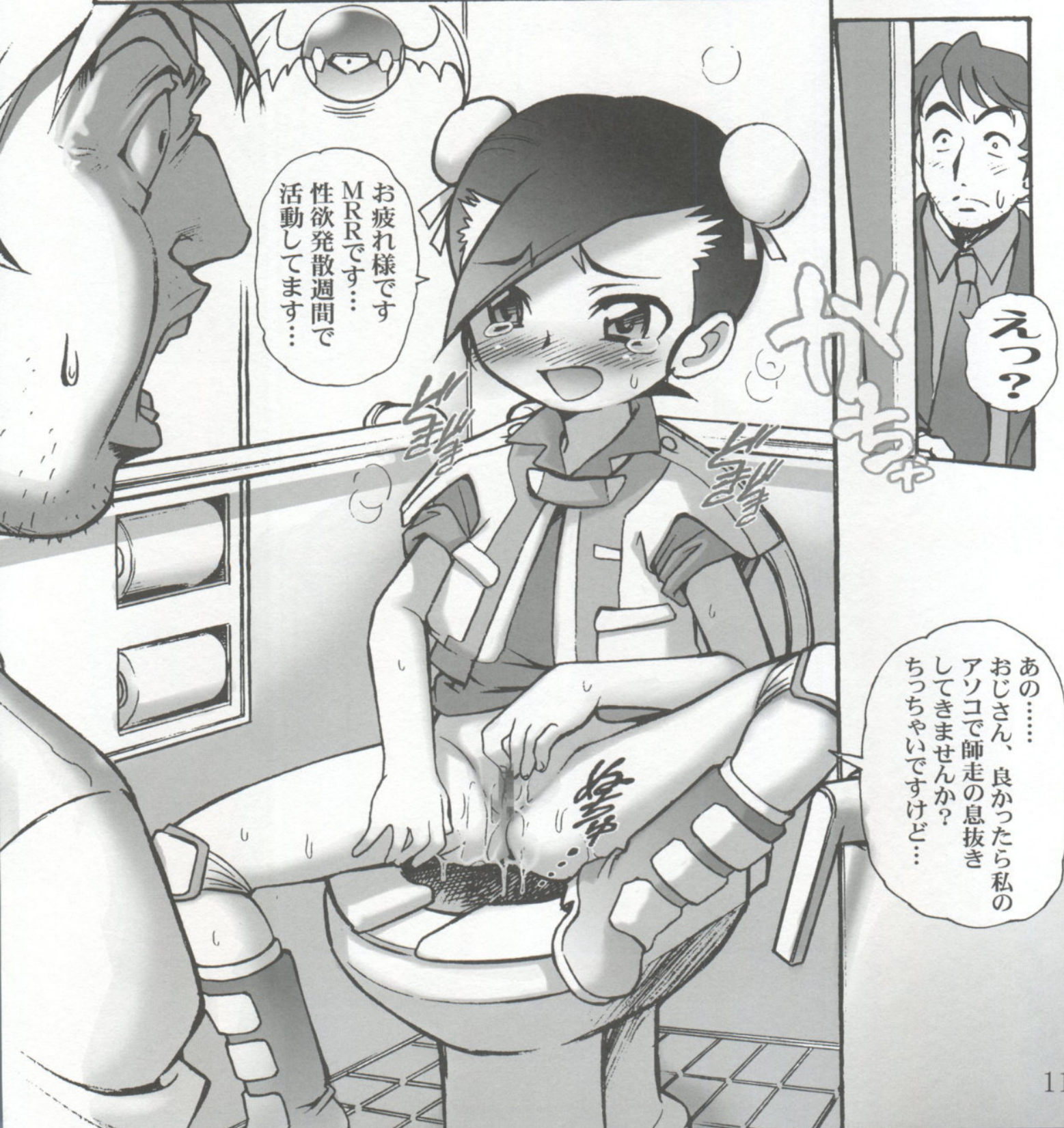
おーおー、見事なイキっぷりだなっ  
よし、それ買ったっ!  
領収書ちゃんと『MRR』で切れよ

……  
NAME: MARI  
『MRR』で  
領収書をお願い  
します……



お父さん  
またトイレ？  
じゃあ待つてるから  
早くコレ買ってねっ

やっと見つけた  
ハイパーシャトルロボ  
なんだからっ



お疲れ様です  
MRRです…  
性欲発散週間で  
活動してます…

えっ？

あの…  
おじさん、良かったら私の  
アソコで師走の息抜き  
してきませんか？  
ちっちゃいですけど…

あの…  
すぐに使えるように  
暖気しておきました

お急ぎのところ  
手間かけると申し訳  
無いし…  
少しは挿入しやすく  
なってるはずですよ

ツイてなかった一年でも  
来年はきつと良いこと  
あります  
……遠慮せずにどうぞ

なんだよ  
このガキ  
もうすつかり  
出来上がってる  
じゃないの  
はねつかえりと  
思いきや従順なのな

一番ノン気かと思ったら  
とんだ食わせ物だったぜっ  
こんな事したいって前から  
思ってたんだろ？（笑）

あつ…  
おじさんの太いの  
滑り込んでくるう  
……ツ！！

それじゃ…  
遠慮無く使わせて頂いて…  
私ホントいつも  
ツイてないんですが  
今日はラッキーでしたヨッ

特にトイレでは  
良い思い出が無いんですが  
今日はこの一年で  
もっともツイてた一日に  
なったなア…

そう…なんですかっ  
うれ…嬉しいですっ

人様の…お役に  
立ててのMRRです  
喜んで貰えて  
…私も嬉しいですっ

ぎちぎちで…  
少し痛いけど…  
おじさんの為に  
頑張りますっ

そ…それが  
MRRだもの  
…っ!

お嬢ちゃんのお陰だっ  
年末の最後の最後で  
この私にもツキが  
まわってくるなんて…  
純にも自慢したいくらい  
ですよっ!  
あ、純って私の息子でして  
女の子みたい可愛いんですけど

おじさんの…  
悪い運気が私の中に…  
これで…来年は  
良いお年になれますよっ



ホント息子に  
見られるとはなっ  
このオッサン！  
ついでにそのガキも  
喰っちまいなっく！！

あはっはっは

おいっキンパツ  
まだまだ  
大人のオモチャ屋巡りは  
続くぞっ！  
大人のオモチャを  
大人買いだなっ！！

さてっ！  
もう一人のメガネは  
どうしてるかなっ？  
新〇歌舞伎町の  
小百合さんっ！？  
聞こえますかーっ！



はいっ！  
年末の忘年会帰りの  
大人達で賑やかな  
歌舞伎町から中継の  
水前寺小百合で  
御座います

あは

お酒を飲んだ後は  
風俗ですものねっ！  
この不景気の為に  
私、皆様のヘルス代を  
浮かすべく身体を張って  
おりますわっ♪

ノッ  
ノッてますねえ  
小百合さんは  
……

あっ……

ええっ……それでいて  
スしてなくて……男の欲望を  
先読みする気遣い……  
まさに良妻賢母なお嬢様  
かもっ……！！  
かもっ……？  
かもっ……？

お嬢様なんだって

おおっ……！  
この噂ちゃんまじの  
風俗嬢とは格が違うなッ！

皆様の熱き白濁に  
我が身を白く染める  
覚悟で望みますわっ♪  
遠慮なさらないで  
くださいまし♪

お待ちに  
ならずにああ、  
ご自身の性欲を  
弾けさせてっ!

スコイよっ…スコイよっ  
小百合ちゃん!  
師走の肌寒さも極の寒さも  
全て暖かく癒されるっ!

ええっ☆  
私も身体のコまで  
暖かくなりますっ  
もっ…もっ…  
皆様と一緒に暖かく…!

これで…いい年が  
迎えられるよっ!  
さよなら2003年ッ  
ようこそ2004年ッ  
!!!!!!



さあ、皆様と一緒に

私の瞳に飛び込んでくださいますっ!!

なか

おいっ！  
なんだよ勝手に  
オトすんじゃ  
ねーよっ！！

俺の思惑  
超えられるのは  
ヒジョーにムカつく  
んだよッ！！



幸せそうな面して  
それじゃあ  
おめーに災害降り  
注いでねーんだよッ！  
犯ってる連中も皆  
幸せそうじゃねーかッ！

特番失敗

■■ 皆様良いお年を♪ ■■

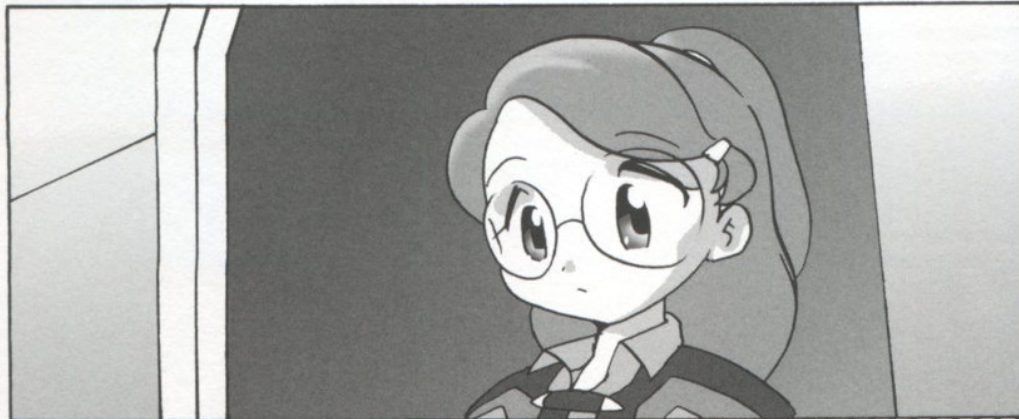


**MRR**  
MACHINE ROBO RESCUE

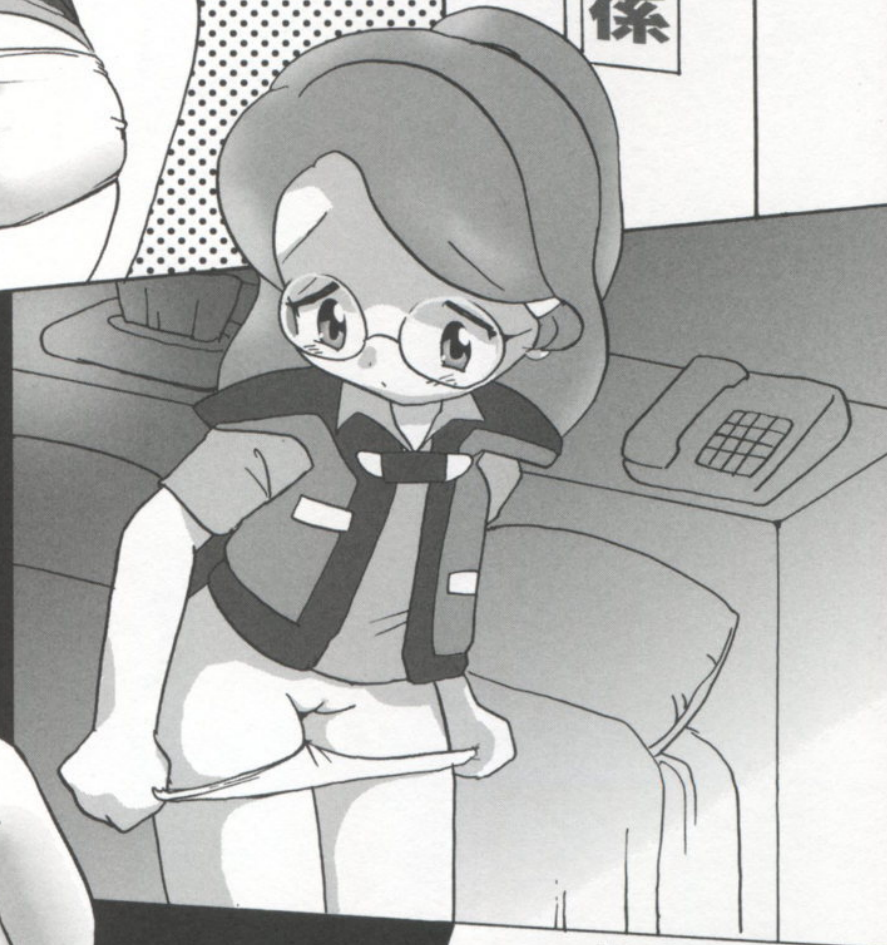
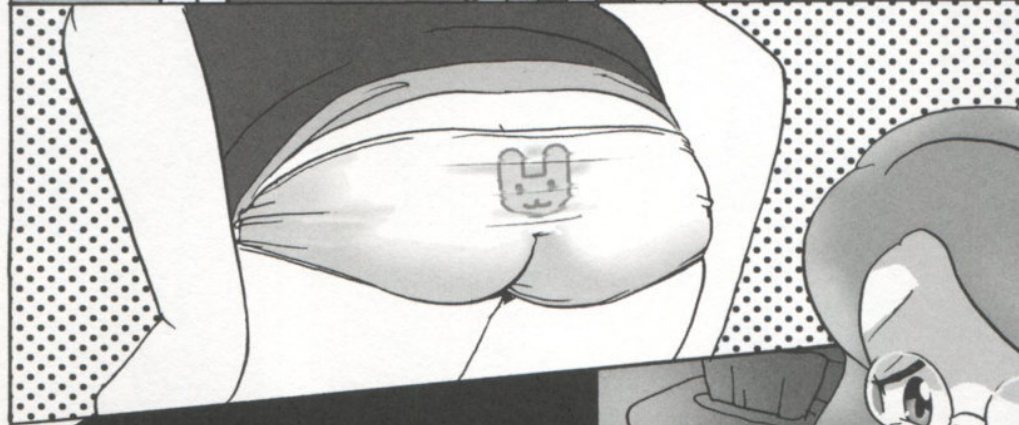
**ALICE**



by mercy rabbit 2003

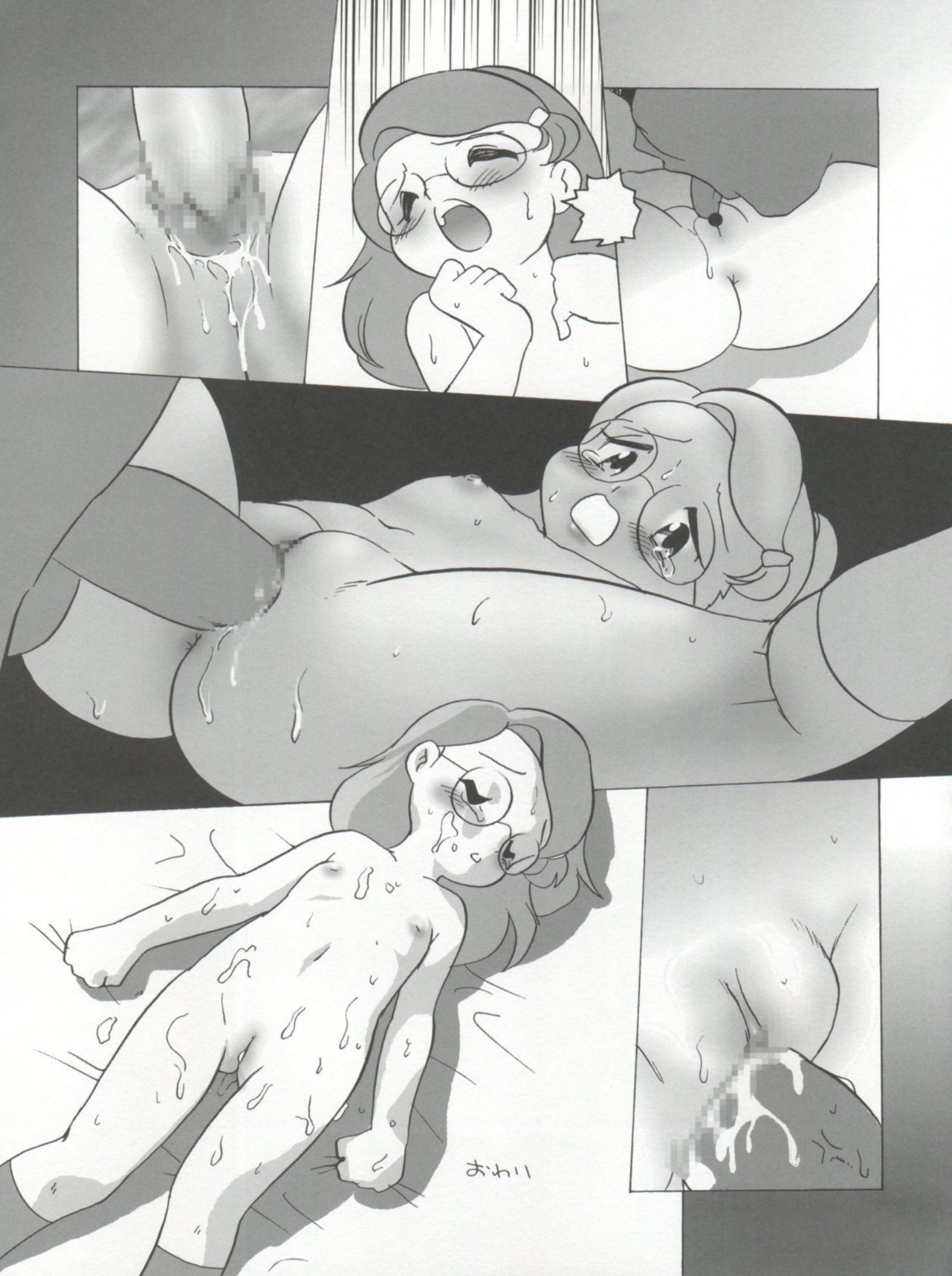


本日の慰安係  
水前寺小百合



ロリータ  
挺身隊

山下うり



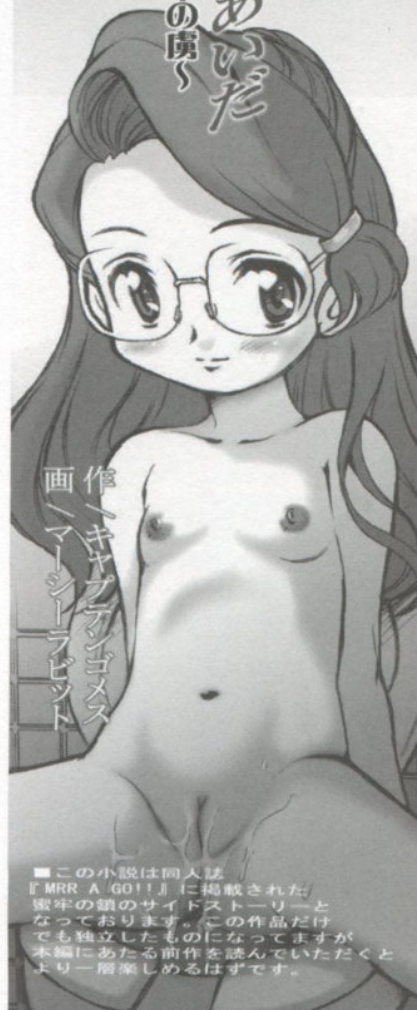
おわい





恋愛と情欲のあいだ

蜜牢の虜



作画：キョウコ・アノイゴメス  
画：マッシュ・ラブレット

そこはまるで  
蜜を固めて作った牢獄だった。  
甘い甘い蜜を固めて作った牢獄だった。  
床も壁も鉄格子もこの身を縛る枷も  
嵌められた首輪も無数の鎖も全て蜜で作られていた。  
これはそんな蜜牢に囚われた者達の物語である。

第一章 蜜牢の鎖

ロボマスターである少年たちのストレス発散と性的抑圧の解放のために、彼らの教官であるマリー・尾藤が、彼ら専用の奴隷としてあてがわれた。

口で、手で、性器で、肛門で、マリーは少年たちをもてなした。  
少年たちは初めて知る性交という名の蜜に酔いしれた。

出勤のあった日の夜に限り、出勤したロボマスターは彼女を自由に出来る権利を有することになった。  
しかし、出勤のあった日の夜に特別室のマリーを訪ねる者は誰一人としていなかった。今日も出勤はあったものの誰もマリーの待つ特別室のドアをノックする者はいない。生まれたままの姿に紅い革の首輪だけをまとった奴隷の正装で少年たちをマリーはただ待ち続ける。

けれど、今夜も誰もこない。  
なぜか？

それは少年たちをマリーに渡したくない者がいたからである。

その者の名は水前寺小百合。

小百合は鈴アリスに協力を求め、自らの肉体を使ってマリーからロボマスターを取り上げる計画を実行した。大地と誠は小百合が。歌田兄弟はアリスが。そして太陽とエースは鈴が担当することになった。

第二章 愛川誠の純情

ある深夜、愛川誠は一人で男子トイレに向かった。

小便器で用を足し終えると同時に背後の個室で大きな物音がした。誠は心臓が口から飛び出そうな程驚いたが、すぐさま物音の正体を探ろうという気持ちで沸き起こった。とはいえ深夜のトイレはもともと身近な怪奇スポット。さすがの誠も個室のトイレのドアを開けるのには一分数十秒の時間を要した。その間もドアの向こう側からは何者かの気配が蠢いていた。耳を濟ませば荒い息遣いのような音も聞こえてくる。ドアのノブに手をかける。カギはかかっている。わずかはかりの逡巡の後、誠は意を決してドアを勢いよく開けた。そこには誠の想像を遥かに越えた現実があった。

誠がひそかに好意を寄せる水前寺小百合が全裸で洋式便器に腰掛けてオナニーに耽っていたのである。秘所に指を滑り込ませてゆっくりと抜き差ししていた。あふれ出た蜜の雫が便器の中に落ちてピチヨンと音を立てた。

「しっ失礼しましたっ!!」

慌ててドアを閉め回れ右してその場を離れようとする誠。しかし小百合の口からはもつと信じられない言葉が発せられた。

「誠さん…私を抱いて下さいませんか?」

閉じたドア越しに聞く小百合の告白に誠はゴクリと音を立てて息を飲んだ。

「私は水前寺の家を継ぐために、いずれ婿を取らねばなりません。そのために幼い頃からさまざまな性技を仕込まれました。旦那様となる殿方をけつして飽きさせないように…」

「でも、ダメなんです…。色々な性技を仕込まれるたびにそれをすぐに誰かで試してみたくなくなってしまいました。淫乱なんです…私…」

「でも…先ほど、ひそかにお願いしておりました誠さんに見られた時に自分の本当の気持ちに気がつきました。私はこうして誠さんに気づいて欲しくて、こうして男子トイレに忍び込み、火照り疼く身体を慰めて鎮めていたのです」

「この疼きは誠さんでしか鎮められません…お願いです…こんな淫乱な私ですが、抱いていただけませんか?」  
小百合が言い終わらないうちに誠は激情に駆られるかの様に飛び込み、力任せに小百合を抱きしめた。

「小百合さん、僕で良ければいくらでも力になります。遠慮なく言ってください。小百合さんは決して変態なんかではありません。自分を卑下するのはやめてください」

言うが早いか誠は小百合の口をキスで塞ぎ舌を強引にねじ込んだ。そのままジャマと一緒に下着を脱ぎ捨て、すでに臨戦体勢となっていた股間の分身を小百合の大事な部分の中で一際敏感な突起に押し当てた。塞がれている口を少しだけずらして小百合は甘い喘ぎとも吐息ともつかない声を漏らした。誠は絡み合う舌を抜き取り立ったままで背後から小百合を貫く事にした。充分過ぎるくらいに蜜をたたえた小百合の蜜壺はいともたやすく誠の分身を受け入れた。思いを寄せる相手と一つになれた喜びにひたる誠。腰を動かすことを催促するために小百合は蜜壺で誠の分身をきゅっきゅっとして締め付けた。上の口ではなく下の口で、そして言葉ではなく行動で催促する。それに答えて誠が腰を動かすと小百合の口から甘い喘ぎが漏れ始めた。深夜の男子トイレに小百合の喘ぎ声と誠の荒い鼻息、そして二つの性器が結合した部分からあふれ出る湿った淫音が響く。いつ、誰が来るかわからない場所で愛を交わすスリル。静まり返ったトイレの中で次第に大きくなる二人の淫声。背徳的な官能に誠は打ちのめされ、痺れ、虜になった。ほどなく誠は絶頂に達して熱い牡のミルクを小百合の体内にぶちまけて果てた。それにあわせて小百合も一際大きな喘ぎを漏らして絶頂に達した。立ったまま身体を重ねて二人は行為の余韻に浸った。

「素敵でしたわ…誠さん。これからは私を抱いてくださいませ。私だけを抱いてください…」

「僕は小百合さん一筋です。決して浮気なんかしません。誓います」

「ふっつか者ですが、こんな私を末永く可愛がってください…」

深々と頭を下げる小百合の姿に、小百合の蜜と自らが放出したミルクに濡れた誠の分身が再び臨戦体勢を取り始めた。

■この小説は同人誌『MRR A GO!!』に掲載された『MRR A GO!!』の作品の一つとして制作されています。MRR A GO!!の作品は、同人誌の性質上、著作権の保護が難しいため、同人誌の発行元であるMRR A GO!!の許可なく、MRR A GO!!の作品を複製、転載、配布することはできません。ご了承ください。

「小百合さん：もう一回、いいですか？」

「誠さんがよろしいなら：誠さんはタフなんですね：嬉しいですよ：こんなに愛されて」

「小百合さんっ！！」

「今度は私：誠さんの顔を見つめながらイキたいです……」

誠は小百合をきつく抱きしめるとそのまま分身を挿入し、すかさず腰を動かした。キスをしたり、まだ膨らみ始めて間もない未発達の小百合の胸に舌を這わせたり、双臀の敏感な合わせ目に指を滑り込ませたりと、誠は一回目よりも余裕のある性交が出来ていた。好意が動きやしぐさに込められているのが傍目で観てもわかるほどだった。そして小百合はそんな誠に身を任せて官能を堪能した。とはいえ誠もまだまだ経験不足。ただただ激しいだけの腰使いは単調で小百合を心底満足させるものではなかった。けれど、多くの女性がそうであるように、小百合もまた演技でそれを隠した。羞恥の仮面をまといつつ牝の表情を覗かせる小百合の演技に誠は騙され、いとおしげな瞳で小百合を見つめる。それに応えて小百合が強く誠の身体を抱きしめる。つい無意識のうちに蜜壺でもきゅっと誠の分身を締め付ける。堪らず誠は二度目の絶頂をむかえて牡のミルクを吐き出した。その律動を下半身に感じながら小百合もまた絶頂を迎えた。

「……いっばい出ましたね。誠さんの好意に比例しているみたい……嬉しい……」

誠は無言で小百合を抱きしめなおし、そして長い長いキスをした。

「行為の余韻を十分に味わい、体の後始末をし終えてから二人は間に紛れるようにして男子トイレを後にした。」

「今度は僕の部屋で……」

「はい……」

次のアポイントメントを取りつけて笑顔をもらす誠。そして小百合に背を向けて自室へと歩き始める。その姿を見送る小百合。

「ふふふ、ホント殿方とはチョロイものですね」

心の中でそう呟くと小百合は目を細めた。

### 第三章 アリス・ベツカムの懺悔

その日、出勤の後でジャイロロボが関節部の不調を訴えたために歌田兄弟はジャイロロボのメンテナンスに立ち会うことになった。不調の原因はすぐに見つかり、簡単な部品交換作業でジャイロロボの不調は直った。オイルと汗まみれになった二人が食事を後回しにして共同浴場に向かったのは午後九時過ぎ。すでに彼ら以外の全員は食事は勿論、入浴すら済ませて各自の私室に戻っていた。

「なあ兄ちゃん、あれから特別室に行った？」

浴場に向かう途中で強が進に尋ねた。

「いや、行ってない。そう言う強はどうなんだよ」

「俺も行ってないよ」

そこで会話は終わってしまい、沈黙が訪れた。

「マリーさんもいいけど：俺はアリスとしたいなあ。アリスの事を考えてオナニーしてる方が好きだし……」

兄弟は同時に同じ事を考えていた。その瞬間に目があい、自分の考えていることを相手に見透かされそうで見線を送らし、少しだけ赤面した。

汗でベトベトの身体を一刻も早く洗いたくて乱暴に衣服を脱ぎ散らかすと、二人は浴室に誰もいないことはわかっていたのでタオルで前を隠すことなく脱衣場から浴室に向かった。けれど浴室には一人先客がいた。

「遅いヨ二人とも！！アリスは待ちくたびれたヨ」

先客とはアリス・ベツカムだった。

「あ、あ、あ、あ、アリス……」

「ど、ど、ど、ど、どーしてここに……？」

慌ててタオルで前を隠す二人。目の前にいるアリスは風呂場だから当然ハダカ。タオルで身体を隠してさえない。目のやり場に困った二人は互いにそっぽを向いてアリスを見ないようにした。しかし一瞬でも生まれのままの姿のアリスを見たのは事実で、その魅惑的な姿態はぼつちり二人の網膜と脳裏に焼き付き、当然タオルの奥の男性機能は起動を開始する。

「二人と一緒に風呂に入りたかっただけヨ？なんでそんなに慌てるの？」

平然としているアリスに対してパニック寸前の歌田兄弟。

「そうそう聞いたヨ、二人ともアリスをオカズにしてオナニーしてるんだって……」

いきなり直球で質問をぶつけるアリス。双子の兄弟は全く同じタイミングで顔を真っ赤に染めた。

「ただただ誰か聞いたの？」

「なななな何で知ってるの？」

ステレオ音声の質問にアリスはビクビクしつつも、

「やっぱりホントなんだネ」

と悪戯っぽく笑った。

「ミズクサイよ、二人とも。みんなブルーサイレンズの仲間じゃない、言ってくれたらフェラ位いつでもあげるヨ」

「ほほほ本当に？」

歌田兄弟がステレオでまた叫んだ。どもろのが癖になってしまったようだ。

「それにネ、フェラ以上の事だってしてあげてもイイヨ。この間二人のおうちにお泊りした時からそんな気持ちなの、何故だか自分でもよくわかんないんだけどネ」

パニック状態だった歌田兄弟の瞳の色が変わった。完全に発情もしくは欲情モードにシフトしている。

「強、兄ちゃんから先にしてもらうからな。もうビンビンで困ってたんだ」

「兄ちゃんずるいよ、僕だってアリスとしたいんだから。こっちはビンビンだよ」

「うふふ、じゃあ二人一緒に面倒見てあげるヨ。正直な二人に今日は特別サービスだよ」

コケティッシュな笑みを浮かべてアリスが二人の瞳を見つめ返した。その表情だけで股間の緊張が暴発しそ

うだった。

「どちがどち？」

アリスがまるで子犬のような小さく尋ねる。

「俺、お口でもらいたい……」

「俺、アリスのアソコがいい……」

同時に叫ぶ二人。声はかぶったが希望はかぶらなかった。

「四つん道い前後からってのがスキなんだよネ？でもいきなり二人同時は無理だから先に進の相手をするネ。強はちょっと待っててヨ」

「……でも、はじめに言っておくとね、アリスはバージンじゃないんだヨ。それでもいいの？」



伏し目がちにアリスが告白した。

「子役だったときにね、役をもらうために何度か大人の相手をさせられたの…。そのときはなんとも思わなかったけど…大きくなって物事の分別がつくようになって…自分のした事の愚かさ気がついて…やっぱり大好きな人とこーゆー事はするべきだ…って気がついて…だからやり直す意味でMRRに来たんだヨ。こんなアリスでも、ホントにいいの？ね進？強？」

「パーズンじゃなくてもいいよ。アリスはアリスじゃないか」と進。

「それを言うなら俺たちだつて、アリスをオカズにしておきながら筆おろしはマリーさんだつたし…お互い様だよと強。

「ありがと。二人とも…アリスは二人とも大スキだよ」

「そう言うが早いよ、アリスは進の前に跪くとなく口をあけて進の怒張した分身をバクッと啜えた。

「ああアリス、汚いよ…まだ洗ってないんだから…」

慌てて進は腰を引くがアリスは口を離さない。

「それに俺の身体、汗臭いだろ…洗ってからでいいよ…」

進の言葉には耳を貸さずに一心に進の分身をほおぼるアリス。年齢には随分と不相応なテクニクの持ち主だった。汗と性臭の混ざった進の分身をまるでキャンディーやジェリービーンズをしゃぶるように味わう。そのしぐさはまるで子犬のようだった。足元にじゃれつく子犬のような少女の姿を見ていると進の股間の分身は一段と膨張した。あの日はじめて体験したマリーの口戯に比べたらまだまだ稚拙なところが多いが、それでも進にとつてはなにより快感だった。薄くて小さな舌がまるで意思を持った小動物の様に進の分身の周りを這い回る。時に静に、時に激しく。チュパチュパと音を立てていたかと思うと一転無音のときが訪れる。進にとつて快感より至福と呼ぶべき時間であった。好意が伴う行為は何にも勝る。程なく進は絶頂の坂を一気に登りつめてドロリとした牡のミルクをアリスの小さな口の中にしたたかに放出した。アリスはそのミルクを苦も無く飲み下すと極上の笑みで進を見上げて「お粗末様でした」と言った。

「次は強の番だよ。進のオチンチンしゃぶってたらこんなに濡れてきちゃったヨ。早く挿れて欲しいヨ…」

ゴクリと音を立ててツバを飲み込むと強はアリスを抱き寄せて正常位で挿入を開始した。大柄な体格に比例して標準サイズより2サイズほど大きな強の股間の分身は意外なほどスムーズにアリスの中に収納された。時折アリスが辛そうな表情を浮かべたのを強は見逃さなかった。だから強は必要以上に慎重に時間をかけて進入を続けた。ようやく強の分身はその全部をアリスの体内に納めることに成功した。身体が一つに繋がってみると初めて解る事がある。例えばお互いの肌の色。例えばお互いの体格。そしてお互いの体温。幼くても男と女。どこまでも頑丈に出来ている身体とどこまでも繊細に柔らかく出来ている身体。まさに正反対。けれどこうして一つに重なり合うためにつくられている身体。そしてその身体を一つにするという、何度も夢に見、妄想した瞬間がついに訪れ、強の心の中に湧き起る感情は、まさに至福としか言い様がなかった。

アリスの体温。

アリスの吐息。

アリスの髪。

アリスの肌。

アリスの声

すべてが媚薬だった。

気がつくとも強は腰を前後に動かしていた。長いストロークで激しく一気に攻めたるようにアリスの体内を穿つ。じゅぶつと湿った音が二人の結合部から漏れる。強の分身の下側にある皮袋がトントとアリスの裏門の扉をノックする。微妙な時間差でもたらされる二種類の快感にアリスの口から歓喜の音が漏れる。強は腰の動きを止めて、今度は結合部の上側にある綺麗なピンク色の肉芽を指で撫でた。

「ひゃんっ、そこはダメ…感じすぎちゃう…」

恥ずかしくアリスは告白する。ダメと言われれば責めなくなるのが男。ダメもイヤもこの場合は「して」と同義語である。強は強弱をつけてアリスの弱点である敏感な肉芽を指で玩んだ。

「やだ、やだ、イッちゃう。意地悪しないでヨ。強…アンアン…ヤダ…イッちゃうヨ…」

アリスからのお願いを無視して強は愛撫を続けた。程なくアリスの身体がビクンと大きく反応した。アリスは強の肉芽への愛撫で絶頂に達してしまつたのである。

「意地悪、強。ちゃんとオチンチンでアリスをイカせてよ…」

アリスはぶつとほつべを膨らませてふてくれ気味に言った。

不意に強はアリスを抱きかかえる様にして体位を変えた。正常位から女性上位へ。身体を繋げたままでもスムーズに出来た。

「こうしたら、もつと感じるんじゃない？」

強の身体の上に跨る形のアリスのお尻に冷たい液体が垂らされた。垂らしたのは進。二人の行為をただ見ているのがガマン出来なくなつた様である。もつともそんな兄の気配を察して強は体位を入れ替えたのであった。さすがは双子、以心伝心である。強はついでにアリスの双臀をつかんで開き、奥に隠されている裏門を露わにする。兄の目論見をいち早く察知したのである。流れ落ちる液体はアリスの裏門を濡らした。

「なにコレ？なににするの進？」

「へアートニクシャンプーさ。ローションの替わりだよ」

「ひゃんっダメ！アリス、そこだけはダメなの！！」

「へー、ここがアリスが一番感じるのか」

進は、これ以上は無理という所まで指を差し込むとしみじみと言った。

「兄ちゃん、急にアリスのオマンコ、締め付けがきつくなつたよ」

「じゃあ、こうしてみようか？」

進はアリスの体内に収納した指を曲げてみた。

「あん、あん、ダメ…進…」

「すごい兄ちゃん。アリスのオマンコ、きゅっきゅつと何度も締め付けてくるよ」

「感じるかい？アリス。お尻の穴は初めてだった？」

「意地悪…。そっちはホントにパーズンなんだよ…」

「へんだよ…お尻の穴は冷たいくらいにスースーするのに、でも内側はすこく熱いの…不思議…な感じだよ…」

「じゃあ、もつと気持ちよくさせてあげなくちゃな」

アリスの裏門から指を引き抜くと、進は完全に臨戦体制の整つた自らの分身にたつぷりのトニクシャン

プーを垂らして塗した。そのまま、まだ完全に閉じきっていないアリスの裏門に透明の液体まみれの分身をあてがい、ノックも無しにいきなりこじ開けるようにして突入を開始する。アリスが身体を大きく仰け反らせた。

「ダメだよ…そこは…進…お願い…」

「アリスはアマノジャクだから、ダメとかイヤってのは、イイとかもつとしてって意味なんだよな」

「そうそう」

主導権をアリスに握られていた歌田兄弟の逆襲が始まった。

アリスの裏門からの侵入した進の分身が行き止まりまで達して動きを止めると、それに合わせてアリスは大きく息を吐いた。進はまだ腰を動かさない。ただピクピクと分身を二度三度震わせる。すると、それに合わせてアリスが身体を震わせて反応した。進の様子をうかがう強もまた進にあわせて腰の動きを止めていた。

「あつたかないアリスのお尻のなはは…」

「オマンコもあつたかいよ…」

「そろそろ熱くさせてやらないとアリスが可哀相だよな」

「そうだね兄ちゃん」

ぐつと両腕に力を入れてアリスを支えながら進と強は立ち上がった。無論身体は繋がったままである。アリスは状況が飲み込めず目を白黒させるだけ。

「ほーらアリス。高い高い」

赤ちゃんをあやすような口調で進が言った。アリスは二人に抱きかかえられた状態で宙に浮いていた。どんなに伸ばしても足の裏が届かない。不意にズンとアリスのお腹の奥になにかが響いた。アリスの背後の強が腰を動かしたのである。そのすぐ後に再び衝撃。今度は前にいる強がピストンを開始したのである。ズンズンとリズムカールに響く衝撃は脳天を突き抜けると同時に快感信号に変換されてアリスの頭の中を駆け巡る。互い違いの衝撃が少しずつズレ始める。ズンズンがズンとなり、程なくズンと二つの衝撃が一つに重なる。

「あつあつ、あん…夢みたい…アリス…飛んでるみたいだよ…」

強の身体にしがみついたままアリスが歓声をあげる。アリスの肉体はまさに直列二気筒の快感エンジンとなっていた。膣と直腸がシリンドラーで進と強の生殖器がピストンである。経験豊富なアリスでもこのプレイは初めてだった。口と生殖器というPならば経験があつたが、先ほど告白したとおり、アナルプレイは初めてだったのである。

そもそも好きだと認識した相手とセックスするのがアリスにとっては初めてだった。子役時代に大人たちに抱かれたり、オモチャにされたのはあくまで、子役の仕事の延長と考えていたからである。けれど、自我が芽生え思春期も近づくとアリスは、仕事で大人とセックスすることは汚い事だと思ふようになった。本当に好きな相手と結ばれるセックスが理想、という少しばかり青臭い考えがアリスの心の中を占めてはじめていた。自ら犯して来た過去の罪の重さを誤魔化すために、『アレは仕事。自分の意思ではなかつた』と言いついて聞かせてきた。汚れてしまった自分の身体を呪いつつもこれから先の未来に希望をつないだ。こんな自分でも過去の古傷込みで愛してくれる人がいつか現れる。そのために子役という仕事を捨ててマシンロボ・レスキューにやってきたのだ。

大きくなる快感にアリスの意識がホワイトアウトする。アリスの心が過去から現在へと呼び戻される。アリスの身体を穿ちつつける進と強のピッチが速くなる。アリスはただ二人のもたらす快感を享受するだけであつた。強の身体にしがみついたまま、子犬の泣き声のような甘えた喘ぎを漏らすだけであつた。

「あんあん…いいよお…アリス…イッチャやうヨ…進…強…やめちやダメ…」

「アリス…出るよ。いっぱい出すよ。全部受け止めてくれよな」

「アリス、こつちも出るよ。もう限界だ」

そう言う進と強は同時に牡のミルクをアリスの体内に放出した。アリスもほぼ同時に絶頂を迎えた。自分の体内に放出された牡のミルクの感触がずいぶんトリアルに感じられた気がした。二人同時に果てた。進と強の動きが止まった。アリスの身体から力が抜ける。

「…進…強…ありがと…すつこく気持ちよかつたヨ…」

「お粗末様でした」

進と強の声がユニゾンで応えた。

「じゃあ、アリス。今度は一緒に湯船に入ろうよ」

「アリス、一緒に身体を洗いっこしよう」

「うんっ」

アリスは二人の申し出に極上の笑顔で応えた。

好意と行爲。好意だけでなく、行爲だけでもない。好意ゆえの行爲。

アリスはようやく望んでいたものを手に入れることが出来たのである。

#### 第四章 速水大地の罪と罰

大地の母、穂村芽子が言うには速水大地は小さい頃から食の細い子供だったそうである。またやさしいだけ取り得の子供だった。だから過保護とまでは行かないまでも大地の両親は大地をそれは大事に育てた。

大地の父は、大企業、速水重工を一代で興した傑物である。がつりしりした体格の彼は自分の息子も自分同様に逞しく育てて欲しいと願っていた。

そんな父の思いを知りながらも、それに対して思うように応えられない自分を大地は歯がゆく思っていた。恥ずかしいと思いつつも、大地は小学校に上がってから母親と一緒に風呂に入ることが多かった。というのも、女優をしている母とは家で一緒に過ごす時間が少なく、母が家にいるときは極力大地と一緒に過ごす努力していたためである。だから母が家にいるときは一緒にベッドで寝ることも多かった。

その日、大地が一人で風呂に入っているとしばらくして母が入ってきた。大地はすこしだけ恥ずかしいと思つたけれど、それを口にするには母を傷つけることになると思ひ黙っていた。

「大地君、身体洗ってあげるわね」

身体を洗おうと浴槽から出た大地に向かって母が言った。

「いいよ、僕、自分で洗えるから…」

小さな声で大地は母の申し出を拒んだ。けれど母はそんな大地の願いを一蹴した。

「ダメよ、大地君、自分で洗うといつも耳の後ろが汚れたままじゃないの」

母も浴槽から出て大地の背後に腰掛けた。ボディソープに手を伸ばすとそのまま石鹸を使って泡立て始める。程よく泡立ったところで大地の背中をこすり始めた。

背中、首、耳の後ろ、わきの下、腰、お尻、とみるみる大地の身体は泡に包まれていった。と同時に大地の下半身に異変が起きる。

「さあ、今度は前よ大地君」

母がボディソープを手に立ち上がり、大地の前に回った。大地は慌てて異変のあつた箇所をタオルで押さえて隠した。けれど、控えめな大地の性格と反比例してわがままな位に自己主張している下半身の分身はタオルを被せたくらいでは隠せるものではなかつた。

「まあ」

それだけ言っただけで黙ってしまった。気まずい沈黙。

「こんなこと、はじめてよね、どうしたの大地君？」

母はやさしく訊ねた。大地は答えない。母は笑顔で大地の答えるのを待った。大地は目を逸らして「だって…ママのおっぱいとかが背中にあたるから…」と答えた。

「大地君、ママにおっぱいで勃起しちゃったんだ。もう大地君は大人にはじめているのね」と母はしみじみと呟いた。

「大地君、恥ずかしがらずにママに見せてごらんさい」

母はやさしく諭すように言っただけで大地の股間のタオルを取り上げた。大地は俯いたままで合意した。果たしてタオルの下から現れた大地の分身は母、冴子の想像以上のサイズだった。がっしりした体格の夫の分身も実に立派なサイズであったが、息子のそれも勝るとも劣らぬサイズだった。まだ子供で成長途中と考えれば、父を追い越すのは時間の問題と思われた。さてどうしたものだろうか…と考える母の頭の中で不意に欲望が湧きあがった。

「大地君の筆下ろしをしてあげたい」

馬鹿な事を…と母は慌てて頭を振った。けれど一度生まれた欲望はそれを果たすまでけっして消えることは無い。

「大地君とセックスなんて許されないわ。実の息子なのよ」

「だってらお口でしてあげれば…」

「あのサイズ…パパとも最近…無沙汰だし…」

「なにを考えているのかしら…どうかしてるわ今日のワタシ」

「でも大地君は昔から大事に育ててきたんだし…これ位してあげても…」

一瞬の間に色んな思いが交錯した。

母の心の中を見透かしたのか、大地は立ち上がって母に抱きついた。

「僕、ママとセックスしたいんだ…。ママの事大好きなんだ。テレビで見たママの姿が僕の初恋だったんだ。一度でいいから、一度だけいいからママとセックスしたいんだ」

魔が差す、というのはこのことを言うのだろうか。母、冴子は気がつくとも大地を抱きしめくちづけをしていた。撮影の仕事と夫の多忙が重なって気がつくとも一月近く情を交わしていなかった。けっして欲求不満ではなかったが大地の告白が冴子の心に火をつけた。背徳的行為が追い風になって一瞬にして激しく燃え上がる。そして夫にも言い出したことの無い恥ずかしい欲望を息子にぶつけることにした。息子、大地は決してそれを拒まないと計算した上で…。

「いいわよ大地君。一度だけならセックスしてあげる。親子は本当はセックスしてはいけないのよ。それにママのお口と大事な所はパパのモノなの。だからママ、お尻の穴で大地君とセックスしてあげる。アナルセックスって言うのよ。それでもいい？」

大地を正面から見据えて冴子は言った。大地は黙って頷いた。再び二人は唇を重ねた。食するようなキスの後、大地は母の乳房に吸い付いた。豊満で形のよい母の乳房は幼い頃の記憶のままだった。すいっくような肌の感触が大地の脳髓を痺れさせた。乳房を乳首を、摘み啜え舌を這わせる。冴子の声が甘味を帯び始める。

「大地君…そろそろいいわよ…」

冴子はそう言うのと四つん道いになって形のよい双臀を大地に向かって突き出した。おそらく大地の愛撫を胸に受けながら指でほぐしていたのだから、冴子の裏門は柔らかく膨らみはじめており、異性の受け入り準備は完了して



いた。それでも念のために冴子は大地のそそり立った分身にローションを塗した。大地はそのまま冴子の裏門に自分分身をあてがうと一気に侵入を開始した。ローションのおかげですんなりと大地の侵入は成功した。

「ママの中に僕のオチンチンが入ってます…あたたくて不思議な感じですよ」

咳のように大地が言った。そのまま前後に大地が腰を動かした。それにあわせて冴子も腰を動かし、直腸で大地の分身を締め付ける。力を入れたり、力を抜いたり。タイミングを合わせたり、わざと外したり。いままで体験したどんなパイプやディルドーよりも大地の肉棒は冴子のアナルにマッチした。腰をただ前後に動かすだけの稚拙な腰使いなのに、冴子はえいめい魅力を感じていた。

「ああ…気持ちいい…僕…もうダメです…」

大地が喘ぎ声を漏らし始めた。その言葉に反応して冴子も絶頂への坂道を駆け上り始めた。

「ママ…もうダメ…僕…気持ちいい…精液、出ちゃいます…」

「ああ…気持ちいい…僕…もうダメです…」

二人は同時に絶頂を迎えた。ピクンピクンと熱いミルクを放出すると、大地はそのまま母の背中にもたれかかった。冴子は息子の身体の重みを感じながら初めて体験したアナルセックスの快感を心に刻み込んでいた。もう二度と味わえない快感であるから…。そして二人は行為の後始末を終えると一緒に湯船に入り、その後で身体をお互いに洗った。お互い無口なままで浴室を出た。そして一生に一度きりの思い出を胸にそれぞれのベッドに入った。それからしばらくしてマシシロポレスキューに入隊するため大地は家を出た。

大地は怖かったのである。一度きりという約束で交わした母との秘密の関係をまた求めてしまう自分を、自戒心に自信が持てないことが恥ずかしくて悔しかった。あの日以来、大地は母も父もまっすぐに見ることが出来なくなっていたから。

だから、大地はマシシロポレスキューに入隊した。母への欲望から距離をとるために。そして母への欲望に負けない強い男になるために。

その日、おやつとして出されたのはフランクフルトソーセージだった。特大サイズのソーセージに木の棒が刺さっている、おなじみのアレだった。

大地は配られたソーセージを手にとると、口をつけることなくそのまま自室へと戻っていった。普段から小食気味の大地だからレスキューのメンバーはその行為に疑問を感じなかった。ただ一人を除いては。

大地は自室に戻るとすぐさまズボンとパンツを脱いだ。股間の分身は天を仰ぎ、その先端からは早くも先走りの露が滲んでいる。大地は人差し指でその露をすくうと亀頭全体に塗り広げた。そのままベッドに上がりうつ伏せになると隠れていたローションを手にとり、手馴れたしぐさでお尻に垂らした。そしておやつに出されたフランクフルトソーセージにもローションをたっぷり垂らすとそのままお尻にあてがい一気に裏門から体内に侵入させた。大地の裏門は完全にソーセージを飲み込み、すばめた口先からは柄となる棒だけがしぼの様に飛び出していた。そこに指を乗せて振動を与える。ズンズンと小刻みに衝撃が直腸を抜けて腹部に走る。空いている手で反り返った股間の分身をしごく。振動と摩擦が混ざり合い大きな快感になる。

「ああ…ママ…」

大地はベッドの下に隠れていた母の写真を取り出した。そこには光り輝くような笑顔の母が写っていた。あの日の禁断行為を思い出しながら自慰に耽る。自分を犯すことで母と一体化する。あの日二人が体験した快楽を一人で味わう。肛門と直腸を犯して射精する。それが大地のオナニーであった。そしてそれはエスカレートしがちな母への欲望を抑制する唯一の手段でもあった。

頭の中に白いもやがかかったように大地の意識が混濁する。絶頂が近づいているのだ。脳が処理落ちして快感以外は処理されない。視覚や聴覚はすでに必要最小限の情報しか伝達してない。だから近くにいるはず無い人間がいるのに知覚出来なかった。そしてそのまま大地はベッドの上で大量のミルクを放出して果てた。精液がシートに染み込む前にタオルで拭き取らなくては。そう思ったときに誰かがそっとタオルを差し出した。同じイエローギアーズの仲間、水前寺小百合であった。

「小百合さん…どうして？」

タオルに手を伸ばした状態で硬直する大地。

「早く拭き取らないとシミになりますわよ？なんなら私が拭き取りましょうか？」

笑顔で答える小百合。大地は慌てて小百合の手からタオルを取りベッドを拭き始める。

「ねえ、大地さん。この事をレスキューの皆知つたらどうなるかしら？」

小百合の笑顔が悪魔の笑みに変わる。

「それだけはやめてください…僕、もうこじか居場所が無いんです」

「大地さん、私の奴隷になりなさいな。そうすれば私が今観た事はみんなには黙っていて差し上げますわ。それに私の奴隷になればそんなソーセージよりいいモノであなたのお尻を犯してあげますわ。どうです、この提案？」

小百合の提案は悪魔の提案であった。けれど大地にとって選択の余地はなかった。家に帰る弱さも、近親相姦願望をみんなに知られてここで生活する強さも無い。大地は小百合の提案を飲むことにした。

隸属。それが大地の選んだ道であった。あの日バスルームで犯した罪はどこまで行っても自分を責めつつけるのだろうと大地は思った。ならばどんな罰でも受け続けよう。なぜならあの日犯した罪を後悔したことは一度も無いのだから。

### 終章

そこはまるで蜜を固めて造った牢獄だった。

甘い甘い蜜を固めて造った牢獄だった。

床も壁も鉄格子もこの身を縛る枷も嵌められた首輪も無数の鎖もすべて蜜で造られていた。

けれど、牢獄と認識しなければそこはパラísoでもあった。

蜜を望む者には牢獄を。

蜜を望む者には極上の蜜を。

それが蜜牢。蜜で出来た牢獄。

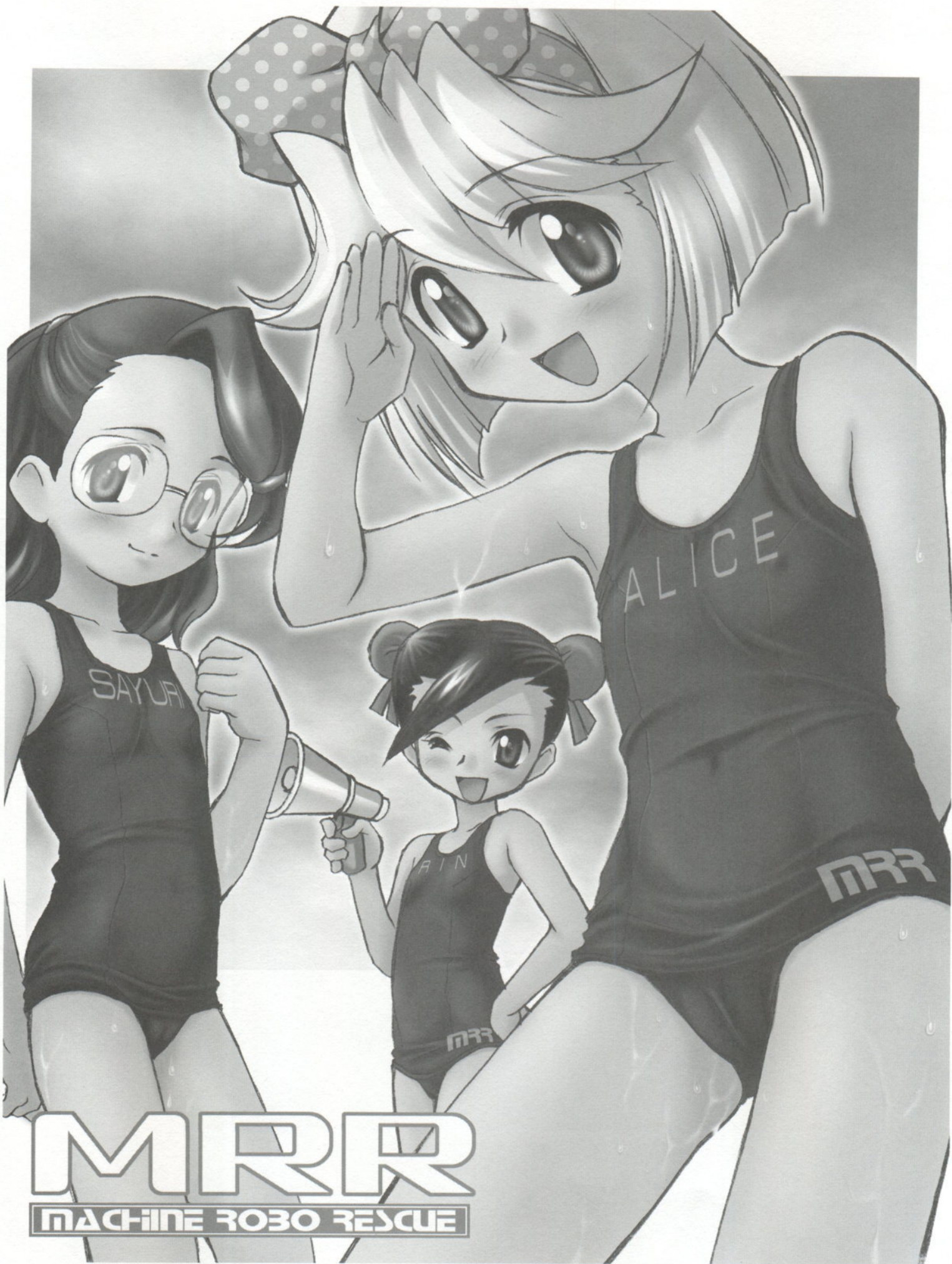


MACHIN ROBO RESCUE

# Alice

BY MERCYRABBIT 2003





**MRR**  
MACHINE ROBO RESCUE



白い巨塔

壘希











# ATOYAKI

# ATOYAKI

DANGER

DANGER

DANGER

DANGER

DANGER

DANGER

こんにちは、マーシーラビットです。  
2003年最後のインフィニティフォースの本『BL ARE GO!!』をお届けします。  
夏はともかく番組も残すは正月特番しか無い状況で、冬コミのMRR本自体少数なのが予測できるのが、悲しい事ですが、番組自体は本当に一年楽しませて頂きました。番組スタッフの皆様、お疲れ様でした。  
来年は玩具展開のみなのがちと悲しいと言えは悲しいですが、再来年のTV再登場の噂を信じて、ムゲンバインは買わせて頂きます。

またまたばたばたしてしまった状況で、玉橋をあげて頂いたゲストの方々には大変感謝しております。本当にありがとう御座いました！  
それと、こちらのマンガ仕上げを手伝ってくれたうりさんも有難う。頭あがりませぬ。

来年のインフィニティフォースの活動予定ですが、新旧交えたナムコキャラ本を用意しています。あと未確定ですが2月のヴィネ祭に間に合うならわたおに本もあるかも。ナムコ本以外は予定は未定って事で。

来年もインフィニティフォースをヨロシクお願いします。  
まずは良いお年をっ！！

INFINITY-FORCE の情報はこちらで！

オニミュージック

[http://www.geocities.jp/woory\\_y/](http://www.geocities.jp/woory_y/)

うさぎ用心棒

<http://www.geocities.jp/mercyrabbit01/>

DANGER

DANGER

DANGER

DANGER

DANGER

DANGER

DANGER

DANGER

DANGER



# 無限大!!

INFINITY-FOCRE PRESENTS

発行  
2003-12-30  
INFINITY-FORCE

〒178-0064  
東京都練馬区南大泉4-53-8  
春秋荘202号室

矢島 健晴  
mercyrabbit01@ybb.ne.jp



**INFINITY-FORCE PRESENTS**

**DANGER**



**DANGER** **DANGER** **DANGER** **DANGER** **DANGER**